

編集後記：最近、ひょんなことから落語を聞き始めました。とは言っても、なかなかゆっくり聞く時間は取れないのですが、それでも奥深い世界が広がっているのは分かります。先の大型連休には実際に寄席に行き上方落語を聴く機会もありました。あまり詳しくない僕でも知っている有名な噺家さんがたくさん出演なさっていました。古典あり、少子高齢化を基とした新作落語あり、生で聞くと、やはり違います。楽しんできました。

落語に限らず、芸能一般に言えることのように、テレビなどによく出て華やかなのはごく一握りの人たちだけで、大多数の人は、まあ地味なものらしいです。若手芸人とされる人たちの苦しい処遇をテレビなどで聞くと、じつは結構問題なのではないかと思われるような事もあるのですが、「まあ好きでやっていることだしね」とみんなが思っているし、それに社会全体から見て数が少ないことから、社会問題とされることはないようです。「好きなことをやっている」+「絶対数が少ない」ので、社会問題になりにくい、という構造は、なにやら若手研究者の処遇問題（ポストドク就職問題など）と似ていますね。いや、研究者と芸人を同列に論じては怒られるでしょうか。

ある売れっ子の若手（中堅？）芸人さんいわく、「人数が多くて今のお笑いは飽和状態だ」と。だから、

お笑いを志す人は、まだ「空き」のある噺家を目指した方がよいとの趣旨なのですが、一方、名人として知られる上方落語の長老に言わせると、上方の噺家の人数が200を超えたとかで、「みなどないして食ってんのやろな」。いずれにせよ、厳しい状況のようです。やはり何か、若手研究者の問題と似ていませんか？こんなことを書くと皆さんから本当に怒られてしまうかもしれませんが。

怒られついでに、最近私が感じていることをひとつ。大きな時代の転換点に直面しながらなかなかそれに対応できず、全てが壊れ行くような今の日本の中でも、特に先行き多難だと思われる分野のひとつが、われら研究業界であるような気がしてなりません。先の上方落語の名人が、とある映像で、「落語は残るでしょう」と言っておられました。日本の研究業界は、本当に残る事が出来るのでしょうか。「持続可能な社会」を提唱する本家本元のような業界が、「持続可能」でなさそうだというのは、中にいる我々にとっては悲劇的な事ですが、第三者から見たら滑稽にさえ見えるかもしれません。だれかこれをネタに落語の新作を作ってもらえないでしょうか。でも、理解してくれる人の絶対数がやはり少なそうで、きっと受けずに笑ってもらえないでしょうね。残念なことです。

（高谷康太郎）